

---

## ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.114

June 2019

---

# 2019年度年次大会（9月28-29日） 大東文化大学 板橋キャンパス プログラム決定！

すでにお知らせしましたように、ロシア史研究会 2019 年度の大会は、9 月 28 日（土）、29 日（日）の両日に大東文化大学（板橋キャンパス）で開催されます。

大会プログラムの概要をお知らせします。個々の報告の要旨については、次号に掲載予定です。

なお、大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局（shukran\_afwan (at) hotmail.com (at) を@に換えてお使いください）宛にお送りください。



（会場となる大東文化大学板橋キャンパス 1 号館）

## 【2019年度第63回ロシア史研究会年次大会プログラム】

於：大東文化大学板橋キャンパス1号館 ※プログラムは変更の可能性があります。

9月28日(土)		
	A会場 自由論題報告	B会場 自由論題報告
9:40 ～10:35	浅岡善治 「ドゥイモフカ事件と農村党機構 (1924-25年)——盛期ネツプ の地方スキャンダルの再検討」 コメンテータ：奥田央	岩田行雄 「18世紀ロシア研究における訳語の問 題についての検討—『ロシア作家辞 典』を中心に—」 コメンテータ：鳥山祐介
10:40 ～11:35	熊倉潤 「農業集団化とカザフ人エリート (1929-33年)」 コメンテータ：西山克典	ドミートリエヴァ・エレナ 「『満洲国』の技術者育成政策—「白系 ロシア人」向けの哈爾賓鉱工技術工養 成所とスキデルスキー穆稜炭鉱—」 コメンテータ：生田美智子
11:35 ～13:00	昼食 (11:45-12:45 委員会)	
13:00 ～15:30	共通論題A 「帝政期ロシアの都市と公共」(仮) 報告者：巽由樹子、下里俊行、福元健之 コメンテータ：長縄宣博	
15:45 ～17:15	総会	
17:30～	懇親会(生協食堂)	
9月29日(日)		
	A会場 自由論題報告	B会場 自由論題報告・パネル
9:40 ～10:35	村田優樹 「ロシア革命・内戦期ウクライナに おける民族属人自治」 コメンテータ：松里公孝	宮崎千穂 「19世紀後半における中央アジアの ロシア医学の導入と梅毒対策」 コメンテータ：井上岳彦
10:40 ～11:35	Gennadii Korolov (ウクライナ国立科学 アカデミー歴史研究所/北大スラブ・ユ ーラシア研究センター) “An Entangled Ukrainian History of the Concept of “the United States”: from Cyril-Methodists to the Revolution 1917-1921” コメンテータ：村田優樹	パネル「シベリア出兵と国際環境」 (10:40～12:40) 組織者：兎内勇津流 報告者： 中谷直司「ワシントン会議と日本外交 (仮)」 柴田善雅「シベリア出兵期の日本企業 の進出(仮)」 藤本健太郎「日本軍撤兵問題と極東共 和国の外交(仮)」
11:40 ～12:35	松村岳志 「デカブリスト時代の第2軍の戦闘 序列における将兵」 コメンテータ：田中良英	
12:35 ～14:00	昼食	
14:00 ～16:30	共通論題B 「ペレストロイカ期のロシア史研究再考」 報告者：宇山智彦、鈴木義一、加納格 コメンテータ：塩川伸明	

## 【事務局からのお知らせ】

### ○自由論題・パネル報告者へのお願い

今回は自由論題が8件あることもあり、また今後の目安として会員が共有したほうがよい情報でもあるため、この場でご報告にあたってのご留意点をお知らせいたします。

#### <要旨について>

要旨はすでにご提出いただいておりますが、ニューズレター大会直前号に掲載するにあたり修正をご希望される場合は、7月末日までに事務局鶴見宛にお送りください。特にご連絡がない場合はすでにいただいている要旨をそのまま掲載いたします。

#### <ペーパーについて>

9月13日までに、事務局鶴見宛に、WordもしくはPDFファイル添付にてお送りください。コメンテータには事務局から転送し、本会サイトの会員専用ページにアップいたします。万一遅れる場合は、ご連絡をお願いいたします。

分量は、12000字を目安としますが、例年これより多い事例は見られ、本会としては大会後に『ロシア史研究』（32000字）への投稿を推奨しておりますので、特に強く字数を制限するものではありません。

ただし、今年度は自由論題の数が多く、会員が事前に読む分量が多いことを考えると、12000字程度にまとめていただくほうが現実的かと存じます。

#### <当日の報告時間>

討論時間を多く取るため、最大で25分としてください。

#### <レジュメの配布について>

レジュメがある例は多いですが、必須ではありません。事前のアンケートの結果を踏まえ、ご用意いただく部数の目安を大会数日前までにお知らせいたします。

#### <機器をご使用される場合>

パワーポイント等、プロジェクタをご使用される場合は、10分前までに会場にお越しいただき、司会者などの本会委員と機器のセットをしてください。

なお、どの会場もプロジェクタとはVGAおよびHDMIいずれでも接続可能です。恐縮ながら、Macとのアダプタについてはご自身でご用意をお願いいたします。今年度は、各会場においてPowerPointの入ったWindows PCが備え付けられておりますが、特に動画入りのスライドなど、複雑なファイルになる場合は、ご自身のPCを持ち込まれることを推奨いたします。また、いずれの場合でも、PCの故障等に備え、ファイルはUSBメモリ等にも保存してご携帯ください。

### ○自由論題コメンテータへのお願い

#### <当日の持ち時間>

10分でお願いいたします。

#### <配付資料・機器使用について>

配付資料・使用機器等がある場合は、上記報告者向けのご案内に準じますが、配付資料がある場合は大会数日前～前日にご連絡ください（必要部数について折り返しご連絡いたします）。

## ○大会時の託児について

昨年度の総会で承認されましたように、今年度の大会でも会場内託児および託児補助を実施予定です。すでに会場と同じ建物（別の階）の教室を押さえていただいております。大会2か月前ごろにMLにおいて告知し、1か月半前までに申請を受け付けます。利用料金はじめ諸要領については昨年度に準じます。ご質問がありましたら、事務局鶴見までお気軽にお寄せください。

<アンケートご協力のお願い>

今大会で託児の利用をご検討されている会員の方におかれましては、ニューズレター発行後にMLで流す利用希望アンケートにご回答ください（これは利用申し込みではありません）。

## 【3月例会レポート】

松井康浩

3月例会（於：青山学院大学）は、W・ゴールドマン氏（カーネギー・メロン大学）を報告者として行われた。ロシア革命後の家族政策、工業化の下での女性労働者、1930年代後半の大テロルにつき優れた著作を発表してきた氏は、最も著名なソ連史研究者の一人である。『ロシア革命とソ連の世紀』（岩波書店）第2巻に「テロルと民主主義」の執筆をお願いした経緯もあり、今回、氏の来日情報をえて、例会への招聘が可能となった。

“The State, People, and the Problem of Food in the Soviet Union during World War II”と題した報告は、近刊予定の大作、*Fortress Dark and Stern: Life, Labor, and Loyalty on the Soviet Home Front during World War II* の一部にあたる。本書は、独軍の占領を免れた地域、疎開先の東部工業地帯における戦時の社会史がテーマのようなのだが、報告では、穀倉地帯を奪われ、食料危機に追い込まれた状況下での食料供給・分配の実態に焦点が当てられた。

国防産業や生産労働者を優先した位階的な配給システムの仕組み、極度に不足するカロリー補充を目的とした工場、施設、学校等への土地の配分とジャガイモ等の生産、基幹工場へのソフホーズやコルホーズの優先割り当てと直接的な食材供給、自由価格で販売されるコルホーズ市場の奨励といった一連の施策が報告中で概観されたが、その種の公式の仕組みに依存しつつ、労働者優先の位階的秩序を時に覆す3つの、相互に絡み合う非公式の「実践」が詳しく紹介された。工場や党機関等の幹部が自身に優先的に食料を供給する *samosnabzhenie*、孤児や避難民といった戦時下の弱者に労働者の食料を再配分する *razbazarivanie*、食料の着服 *theft* とそれに密接に結びついたブラック・マーケットの存在である。工場設置の食堂が、温かい食事にアクセスできるほぼ唯一の機会であった状況下で、限られた幹部だけが利用でき、肉類を含む3度の食事が供された特権的食堂の設置は第1の実践例で、労働者の食堂で孤児や避難民にも無料で食事を提供したのは第2の実践例にあたる。前者は窃盗・横領に等しく、第3の実践例の一つともいえる。ゴールドマン氏によれば、本来、自身に配分されるべき食料を奪われた労働者は第1の例に憤り、告発の手紙を多数権力に送ったが、第2の事例に不満を記した文書は見当たらないという。

報告や質疑応答で示されたゴールドマン氏の分析や考察の中で、特に興味深く思えた見解を限られた紙幅で紹介する。まず、配給システムに関して。各種の問題はあったにせよ、多くの人々の生存を可能にしたという点で効果的であり、戦争の勝利にも貢献したことが指摘された。「武器を製造した人々を食べさせられなければ、赤軍がドイツ軍に相対し、戦闘を行うことはできなかつただろう。」この意味でシステムは「上出来

(successful)」だったし、人々もこれを「公平」なものと理解していたという。総じて、ゴールドマン氏は、戦時体制のパフォーマンスを高く評価する。配給システムはもとより、戦時下に行われた生産施設の疎開や人々の動員は体制の大きな力量を示すものであった。前線ではともかく、「銃後では、国家は戦争に対処すべく極めて効果的に行動した」のである。

以上は、戦争への勝利の要因という問いへの解答の一部をなすが、その問いは、体制への人々の忠誠心が維持されたのはなぜかとも言い換えられる。これに関してゴールドマン氏は、ロシア・ナショナリズムや抑圧の効果より、社会主義イデオロギーの力に注意を向けた。社会主義イデオロギーのコアをなした反ファシズム宣伝は、解放された地域で目にしたドイツ軍の残虐行為という事実と結びつき、現実の力を有した。「ソヴィエト権力へのコミットメントと結びついた反ファシズム・イデオロギーはあの闘いでは……重要だったのである。」米国のレンド・リース法による支援が果たした役割が時に大きく見積もられるが、ゴールドマン氏は、それを否定しないまでも、ソヴィエト体制のイデオロギーと体制のパフォーマンスに力点を置いた。

筆者の英語力の限界もあり、ここでの紹介は研究会の内容の一部に過ぎないのが残念だが、第二次世界大戦期の考察が相対的に手薄な本学会における研究状況に照らせば、今回の例会の開催にも一定の意義があったのではないかと考える次第である。



(3月例会の様相 左上：ゴールドマン氏、右下：会場の盛況な様子)

## 【5月例会レポート】

### ○5月例会報告

巽 由樹子

5月12日、青山学院大学にて、浅岡善治・中嶋毅編『人間と文化の革新（ロシア革命とソ連の世紀 第4巻）』（岩波書店、2017年9月刊）の合評会が行われた。評者は乗松亨平氏と巽が務めた。ソヴィエト国家による「新しい人間」の創出に焦点をあてた本巻は、思想、ジェンダー、科学史、美術、文学、音楽、映画、メディアと、多様な文化的事象をとりあげる。史料というテキストから、制度、政策、秩序といった人間の外面を取り巻く環境を明らかにする論考と、思想、学説、創作のような人間の内面からの活動を検証するために、歴史的なテキスト自体を分析する論考が併存しているとも言えるだろう。その各章を、評者2人で分担して講評に取り組んだ。

乗松氏のコメントは、生の全面的改変を目指したソ連のプロジェクトの中核として、社会主義リアリズムを重視した。そしてこれに関わる第1章（佐藤正則）、第3章（中

村唯史)、第4章(瀧口順也)の成果、あるいは、異なる理解の可能性を、ボリス・グロイスやエヴゲーニー・ドブレンコらの近年の研究に言及しつつ指摘した。また乗松氏は、ポスト・スターリン期についての各章が参照するアレクセイ・ユルチャクの議論の要諦は、“「上」(権力)でも「下」(異論派)でもない「中間」があった”というオルタナティブの提示ではなく、はじめに「上から」ありきという一元論だとの見解を示した。これに対してフロアから、やはり三元論とも捉えられるのではないかとの意見が出て議論となった。

巽のコメントには、社会主義時代に内在的な問題系を十分に反映できていなかった反省が残る。他方で、科学史の第5章(金山浩司)、第6章(市川浩)は、帝政期と連続し、ヨーロッパ史ともつながる、知識社会史の新たな視角を提示するものだと思われた。また、第8章(平松潤奈)と、文学テキストとテキスト外の歴史的事象を結びつける方法論についての筆者の応答からは、ソ連史の事象と、ヘイドン・ホワイトからイヴァン・ジャブロンカに至る「歴史の叙述」というトピックとを結びつける可能性について示唆を得た。

近年のロシア史研究には、ポスト・スターリン期からペレストロイカに至る時代や、記憶や身体、創作物やミュージアムにおける表象といったパブリック・ヒストリーの方法論など、新しい課題への関心の高まりが見られる。1年余りにわたった『ロシア革命とソ連の世紀』全5巻の合評会を終えて、例会が、今後も学界の関心の焦点を追い、掘り下げる場となることを願いたい。



(5月例会の様 左：評者の乗松氏・巽氏と執筆者ら、右：盛り上がる合評会の様子)

### 【3月18日委員会議事(於青山学院大学・青山キャンパス)】

1. 大会日程について
2. 共通論題について
3. ニュースレターの発行月の変更について

-----  
ロシア史研ニュースレター  
第114号 2019年6月21日発行  
編集・発行 ロシア史研究会委員会  
(井上岳彦・畔柳千明)  
〒153-8902  
東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科  
地域文化研究専攻 鶴見研究室気付  
-----